様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２３年　６月　１３日現在

機関番号：３４４２４
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008　～　2010
課題番号：２０５３０８３７
研究課題名（和文）放送形態にみられる世界名作再話変容の構造分析的研究
研究課題名（英文）A study on Children's Reading Circumstances :an analysis of the difference of narrative structures between the original stories and the televised animation series "Sekai Meisaku Gekijyo(Children's Classics)"
研究代表者
畠山　兆子　（ HATAKEYAMA CHOUKO ）
梅花女子大学・心理こども学部こども学科・教授
研究者番号：５０１７２９１１

研究成果の概要（和文）：
「ハウス食品世界名作劇場」（1985年～1993年）放映の「小公女セーラ」と「ピーターパンの冒険」について、再話のあり方と映像表現手法の構造分析的研究は一応の成果をあげた。海外受容については、フランスで放映された「小公女サラ」の独自のオープニングを分析して、主人公像とオープニングの役割認識の違いを明らかにした。次の課題である、視聴者の映像による物語理解のあり方を国際比較するため、「ピーターパンの冒険」を使った予備調査を大学生と小学生で実施した。

研究成果の概要（英文）：
Research Outline
Thorough consideration and textural analysis to look at the overall structure of *“Masterpiece Theatre: A Little Princess”*and *“Masterpiece Theatre: Peter Pan”* from the point of view of the similarities and dissimilarities between the original work and the TV version, have been almost completed during this research period. In terms of how those Japanese televised versions have been adapted and interpreted in the overseas context of broadcasting, our consideration has focused on to the characteristic difference of a French televised version of *“Masterpiece Theatre: A Little Princess”* by analyzing the opening structure. To develop and extend our future research regarding how children viewers would recognize and engage with those televised masterpieces in an international context, small-sized pilot studies have been carried out for Year 5 primary children in Osaka, and university degree students who used to be fun viewers at their childhood in Osaka and Kyoto.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	２，０００，０００	６００，０００	２，６００，０００
２００９年度	５００，０００	１５０，０００	６５０，０００
２０１０年度	６００，０００	１８０，０００	７８０，０００
年度			
年度			
総　計	３，１００，０００	９３０，０００	４，０３０，０００

研究分野：児童文学　児童文化　国語教育

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：放送形態 テレビ・アニメーション 世界名作再話の分析 子どもの映像物語享受

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

１．研究開始当初の背景

今日の子どもの物語環境を、アニメーション番組の検討なしで考えることはできない。
児童文学の古典名作が、映像で再話されることで、書籍による物語理解とどの様に変わるのか。番組は今日風に大きく変容していたが、それらが子どもの物語理解にどの様な影響を与えているのか。物語内容に踏み込んだ研究がなされていな状況にあった。

２．研究の目的

（１）古典名作が映像化されることで、物語がどのように変容しているかを明らかにする。（２）今日の視聴者にどの様な物語が受け入れられるのか。（３）それらの物語は子どもの物語環境にどのように働くのか。（４）映像による物語理解はどのようになされるのか。（５）日本製アニメーション番組の物語と映像表現が、海外の視聴者にどのように理解されているのか。研究の最終目的は、映像による物語表現の構造分析的解明を踏まえた受容の有り方の研究である。

３．研究の方法

作品について
（１）原作と映像作品の比較
（２）原作の挿絵と映像が与える登場人物のイメージの比較
（３）オープニングの映像と主題歌の分析
（４）映像表現の特徴の検討
受け手について
（５）視聴者の映像による物語理解の解明のためのアンケート調査
（６）授業による、視聴者の意識と理解の変化の確認
（７）海外での放映とその反応資料の収集

４．研究成果

本研究は大きく２つの目的を持って実施されてきた。子どもの古典名作の受容を考えるとき、映像化による再話の影響を視野に入れることは必須である。再話の過程で、社会と時代をどのように反映させて再話物語が作られているか。原作からどのように変容してきたのか。１つ目は、研究の目的（１）（２）に当るものである。

活字による物語世界の構築と映像メディアによる物語世界の構築は、どのように異なるのか。メディア・ミックスされた今日の物語環境の中で、読書の重要性とは何か。2 つ目は、研究目的（３）（４）にあたる、視聴者は、どのように映像物語を理解するのかを構造分析的に明らかにすることであった。

前者の研究は、「ハウス食品世界名作劇場」で放映された「小公女セーラ」(1985) と「ピーターパンの冒険」(1989) を取り上げ、放送形態、オープニングとエンディングの分析、物語の放送形態等分析を発表してきた。また、海外への輸出については、フランスで放映された「小公女サラ」のオープニング分析を行い一定の研究成果を上げることが出来た。今後の課題は、検討作品を増やすことと、研究目的（５）にあたる、海外で放映された作品の調査と分析を重ねることである。

後者の研究は、前者の研究におおよその見通しがついた 2010 年度に、予備調査に入ることが出来た。記述式アンケート調査を、アニメーション番組について授業を行ったのちに実施した。実施対象は、私立の共学大学１校と女子大学１校、および公立小学校５年生１クラスである。大学の実施日は、2010 年 12 月、第２週の授業時間中に、小学校は、2011 年 3 月に実施した。

大学生に実施した「2010 年度テレビ「世界名作アニメーション」視聴アンケート」の概

要は次のようである。
対象者について　（１）男女の別（２）生年（３）原作『ピーターパンとウェンディ』の既読の有無（４）視覚化作品の視聴の選択（①世界名作劇場「ピーターパンの冒険」　②ディズニー「ピーターパンの冒険」③舞台「ピーターパンの冒険」④絵本『ピーターパンの冒険』）
作品について　（１）「ピーターパンの冒険」第１回を視聴後、第２回の物語展開と最初のカットを予想する。（２）『ピーターパンとウェンディ』（高杉一郎訳　講談社）「１ピーターがあらわれる」冒頭１３行を読んで、次の場面を予想して書く。

表１大学生のアンケート集計
対象者について
（１）共学
男　　６３名（３８％）
女　　１０５名（６２％）
合計　１６８名
女子大　　６７名
（２）共学
1992 年～1995 年生　１３８名
その他　　３０名
女子大
1991 年～1995 年生　　６６名
その他　　1名
（３）共学
既読者　　２２名（１３％）
未読者　１４６名（８７％）
女子大
既読者　　１３名（１９％）
未読者　１４６名（８７％）
未読者　　５４名（８１％）
（４）共学　①１４名（８％）②１３２名（７９％）③３名（２％）④６３名（３８％）
女子大①１１名（１６％）②５１名（７６％）③５名（７％）④１７名（２５％）
作品について
（１）共学　書き込み有り　１６０名
無し　８名
絵有り　１１９名
無し　４９名
女子大　書き込み有り　６７名
無し　０名
絵有り　５８名
無し　９名
（２）共学　書き込み有り　１２３名
無し　４５名
女子大　書き込み有り　５９名
無し　８名

対象者については、原作を読んだ者の数は、女子大が 19%と多かった。共学で原作を読んだ男女の割合は、男７名、女 15 名で、合計では 13%であった。原作を読んでいる者は、他メディアの作品に接している割合も高い。なお、原作はもちろんディズニー作品にも一切接していない者が、共学 14 名（８%）、女子大に９名（13%）いた。
作品についての分析では、（１）の第 2 回の物語についての文章を、パターン分けしてみた。書かれた文章から抽出した構成要素は、①　ピーターの登場②ナナ(犬)の反応③影のエピソード④ティンク（妖精）の粉⑤ネバーランドへの出発⑥ネバーランドでの冒険⑦その他である。
たとえば女子大では、１名を除いて、全てが①を含んでいた。②に触れたのは 8 名、③は 23 名、このうち原作を読んでいた者が 7 名､アニメーションを見ていた者が 2 名いた。④は 7 名､⑤は 45 名、 ⑥は 13 名であった。①と②に触れていたのが 23 名、①と②と③に触れていたのが 3 名、①から④に触れてい

たのが１名であった。①と⑤に触れた者は最も多く 45 名いた。

作品の知名度は、アニメ番組１１名（、ディズニーアニメ５１名、演劇５名、絵本１７名からも明らかである。映像の視聴では、子どもの頃に楽しんだ物語を、アニメーションを見て懐かしく思い出しているフンイキであった。そのためか、視聴した映像から次の展開を予想するのではなく、第 2 回の物語展開を超えて、先の展開まで書く傾向が目立った。⑥のネバーランドの冒険にまで記述した者が 13 名もいた。

これらは成果報告の一端に過ぎないが、本調査の見通しを示唆してくれるものである。詳細な報告は後日になるが、調査研究の成果の一部は、テレビというメディアの語りの特徴と子どもの視聴体験を扱った研究協力者の事例研究とともに、資料集として、2011 年９月に冊子体として報告し、関連研究者ならびに学校現場の実践者に無料配布する予定である。

なお 2011 年度には、「2010 年度テレビ「世界名作アニメーション」視聴アンケート」を発展させた形で、小学校、中学校、高等学校、大学において調査を実施すると共に、日本とはメディア教育環境の異なるヨーロッパの小学生に同様の調査を行い、日本におけるメディア・リテラシー教育のあり方を考える糸口としたいと考えている。

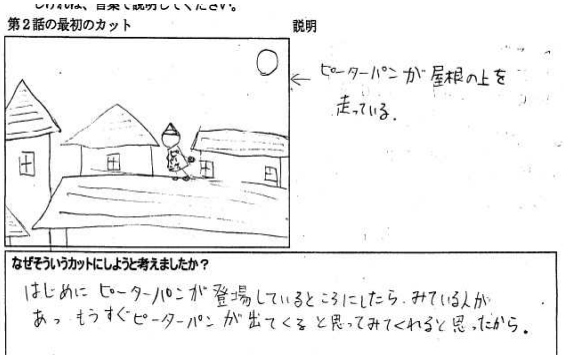
小学校５年のパイロット授業の概観

大阪府下公立小学校５年生２２名のクラスでパイロット授業を行った。大学生の予備調査を踏まえ調査方法に若干の変更を追加した。協力者である授業者から日ごろの読解授業の一環として実施したいとの希望があり、アニメ視聴後に第２回放送の第一カットを予想した際、その根拠を書く時間を十分にとることにした。そのため、原作の冒頭を読んだ上での続き物語の予想においては、時間不足になったことは否めないが、視聴のありようはかなり言語されたと思われる。

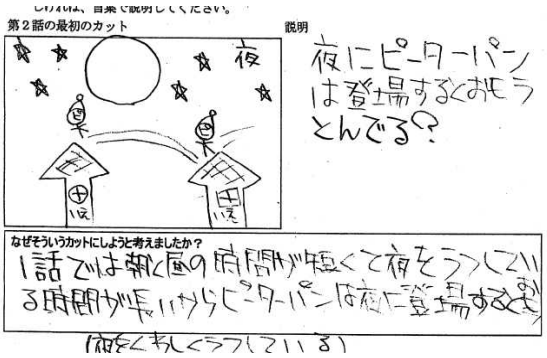
クラスの１割強は、「ピーターパン」について全く知らなかったが、アニメ視聴時のメモ取り、次回の第１カットの予想に関して、それに伴う大差は見られなかった。メモからは、児童が、視聴に当たって、いつどこで誰がどのように現れるのかについて、分析的に観ているのが読み取れた。音楽と人物との関係、カメラが止まると人物が出てくる、クローズアップの使われ方など、語りのパターンにも気づきはじめていた。父親にだけ、名前がないことを指摘した児童はかなりの数であった。視覚イメージと人物の名づけを関わらせて注視している映像読みが窺える。大人と子ども、家の外と中、夜と昼、など、対比的な関係のものに気づく児童も少なくなく、日ごろの国語の読解の授業で習ってきた読みの方法を自然に用いて、テレビの語り特有のはっきりとわかりやすい明確な表現法から的確に読み取っている。

第２回目の第１カットについては、第１回のラストの同一反復、類似反復などによって、違和感を無くそうとする者、第１回目に出てきたシーンやカメラワークを繰り返す形で始めようとする者が、３分の２を占めた。待つ人側から描くのと訪問する側から描くのが、ほぼ同率であったが、空とか、建物の外観といった状況設定カットから始める手法は、一人も選んでいなかった。ピーターは夜にしか来ないからという意見は多数あり、時間設定は、ほぼすべて夜であった。以上から、児童は、ただ見て内容を追っているだけというよりは、映像表現のしかけを読みながら解釈活動を行っているありさまが俯瞰しえた。

以下は、第２カットの事例である。前者は、視聴者の期待感を考慮した例、後者は、第１話において夜という状況設定が重要視されていたこととの関連性から発想した例である。



（なぜそういうカットにしようと考えましたか？
はじめにﾋﾟｰﾀｰﾊﾟﾝが登場しているところにしたら、みている人があっもうすぐﾋﾟｰﾀｰﾊﾟﾝが出てくると思ってみてくれると思ったから。）



（１話では、朝と昼の時間が短くて夜をうつしている時間が長いからﾋﾟｰﾀｰﾊﾟﾝは夜に登場すると思った。（夜をくわしくうつしている））

一方、オリジナル冒頭からの推測に関しては、当該クラスが分析読みの訓練がよくされていたため、続きを考える下作業としての文章の分析、気づきの書き込みのほうに時間のほとんどを費やされた結果となった。そのため所定時間内に続きが書けた児童は少なかった。ただ、細やかな表現に対する気づきは、テレビ視聴と共通するものがみてとれ、時間が許せば、分析的な読みが推測に何らかのかかわりをみせたであろうと予想された。作業時間の問題は、今後の課題である。詳細は、別稿として研究論文にまとめる予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

１畠山兆子『小公女』再話の研究
「梅花女子大学文化表現学部紀要」第６号 pp.１-10　2010.3

２松山雅子「第３章　６　単元学習とメディアリテラシー」『国語科単元学習の創造Ⅰ理論編』日本国語教育学会編、東洋館出版社、2010 年 8 月 9 日、pp.194-206

３畠山兆子「アニメと子ども－その現状と課題－」『消費社会と子どもの文化』第 7 章　学文社　2010 年 5 月　pp. 90－103

４松山雅子「Ⅶ　４　国語科とメディアリテラシー」『中学校・高等学校国語科教育研究』全国大学国語教育学会編、学芸図書株式会社、2010 年 11 月 15 日

５畠山兆子　物語の変容の研究　―再話「小公女セーラ」(1985) のばあい―　「梅花女子大学文化表現学部紀要」第５号 pp.33-43　2009.3

６松山雅子　放送形態にみる名作再話の語り―ハウス食品世界名作劇場「ピーターパンの冒険」(1989) における状況設定としての少女の夢―「国語教育学研究誌」第 26 号　pp.95‐114 大阪教育大学国語教育研究室　2009.3

７松山雅子　内ロンドン教育局国語教育センター CLPE 機関誌 Language Matters(1975-2001)総目次と解題『野地潤家先生卒寿記念論文集』大阪国語教育研究会　編　2009.4.12　pp.302-321

〔学会発表〕（計３件）
１畠山兆子・松山雅子　「２００７年度メディア環境アンケート」の分析研究　日本児童文学学会第４８回研究大会　2009 年 10 月 24 日　北星学園大学（北海道）
２畠山兆子　放送形態にみる名作再話の研究①―「小公女セーラ」(1985) のばあい―第 47 回日本児童文学学会研究大会
　2008 年 10 月 11 日　愛知淑徳大学星ヶ丘キャンパス
３松山雅子　放送形態にみる名作再話の研究②―「ピーターパンの冒険」(1989) のばあい―　同上

〔図書〕（計１件）
１松山雅子編著　畠山兆子　香山喜彦　羽田　潤著『自己認識としてのメディア・リテラシー　PARTⅡ』教育出版　2008.8

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
畠山　兆子（ HATAKEYAMA CHOUKO ）
梅花女子大学・心理こども学部・教授
研究者番号：５０１７２９１１

(2)研究分担者
松山　雅子（ MATSUYAMA MASAKO ）
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：５０１７３９２７

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：